

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 飢餓の救世主：ジャガイモとトウモロコシ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5626">http://hdl.handle.net/10502/5626</a>

# 飢餓の救世主

## —ジャガイモとトウモロコシ—

山本 紀夫

### 飢える者のいなかったインカ帝国

いまから約五〇〇年前の一五世紀末、コロンブスが大西洋を横断し、アメリカ大陸に到達した。このとき、コロンブスは気づいていなかったが、アメリカ大陸には二つの大帝國が栄えていた。ひとつはメキシコ高原を中心として中米に栄えたアステカ帝国であり、もうひとつはアンデスのほぼ全域を領土としていたインカ帝国である。やがて、これらの大帝國の存在はスペイン人たちによって知られ、侵略されることになるが、これらの帝国に初めて足を踏み入れたスペイン人たちが大変驚いたことがある。それは、アステカもインカもどちらの帝国でも食糧が豊かにあり、人口も多いことであった。

たとえば、インカ帝国の首都のクスコは当

時約二〇万の人口を擁する大都市で、そこには数多くの美しい建物があった。このクスコには神殿や住居のほかにも多くの巨大な倉庫もあり、これらの倉庫には大量の食糧が貯蔵されていた。そして、「もしひじょうな凶作の年が来るようなことがあれば、ただちにその扉を開いて諸地方に必要な糧食を貸与するよう命令された」といわれる。こうして、インカ帝国には「物を乞うる者も飢える者もいなかった」と驚いて記録を残しているスペイン人もいる。

それでは、なぜスペイン人たちはアステカやインカ帝国の豊かな食糧に驚いたのであるか。おそらく、それは当時のヨーロッパに十分な食糧がなく、しばしば飢饉に苦しめられていたからではなかったか。それというのも、中世のヨーロッパでは飢饉による食糧不足は

日常茶飯事だったからである。たとえば、ヨーロッパ諸国のなかでフランスは比較的気候が温暖であるが、そこでさえ飢饉は一六世紀に一三回、一七世紀には一一回、一八世紀でさえも一六回も襲ったことが知られている。<sup>5)</sup>

それだけにヨーロッパでは生産性の高い作物が望まれていたはずである。そこに登場したのが、それまでヨーロッパではまったく知られていなかったアメリカ大陸産の作物であった。とくに、アメリカ大陸で主作物になっていたトウモロコシとジャガイモは重要な食糧となり、なかには在来作物にとってかわって主食になったところさえある。ただし、これらの作物がヨーロッパ人にすんなり受け入れられたわけではない。はじめて目にした作物に対する偏見や迷信のせいである。そして、そんな偏見や迷信にもかかわらず、これ

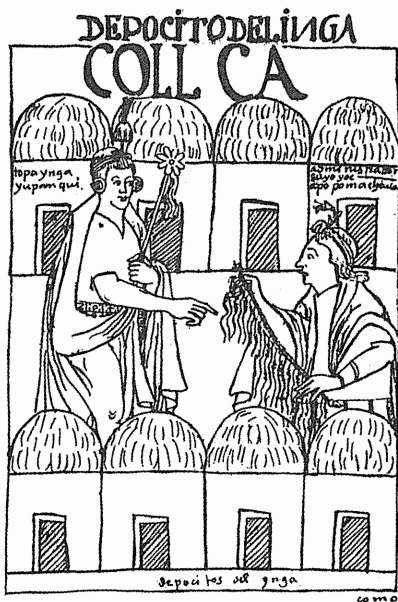


図1 インカ帝国の中心地のクスコには倉庫がたくさんあり、そこには食糧が大量に貯蔵され、飢饉のときには民衆に分配された。



図2 アメリカ大陸では、トウモロコシは主食として、また酒の材料としても重要な作物であった。上の図はトウモロコシからパン（トルティーヤ）を作っているところ、下の図はトウモロコシを噛んで、いわゆる口噛み酒をつくっているところ。

らの作物がヨーロッパの人びとに受け入れられるようになった最大の要因こそは頻発していた飢饉であった。

以下では、ヨーロッパに焦点をしぼり、トウモロコシとジャガイモがどのように受け入れられ、主食としての地位を確立するようになったのか、その歴史を述べたい。ちなみに、トウモロコシとジャガイモはヨーロッパに導入されたあと、アジアやアフリカにも普及し、これらの地域でも重要な作物になったことを付記しておく。

## ブタにふさわしい食べ物

トウモロコシはアメリカ大陸で栽培化されたほとんど唯一といってもよい穀類であり、

古くからアメリカ大陸の各地で広く栽培されていた。とくに中米ではトウモロコシが主食になっていったし、南アメリカでは食料とするだけでなく、酒の材料としても利用するなど重要な作物であった。そのため、ヨーロッパ人としてはじめて西インド諸島に到達したコロンブスもほどなくトウモロコシを目にしている。

そのトウモロコシをはじめてスペインに持ち帰ったのもコロンブス一行であった。時期は、一五世紀末のことである。しかし、そのスペインではトウモロコシはあまり受け入れられなかった。スペインだけでなく、ヨーロッパの大半の地域でトウモロコシは珍しい作物としてしか見られていなかったようであ

る。トウモロコシは雄花が茎の先端部につき、実をつける雌花は茎の途中にある。このような作物はそれまでヨーロッパにはなかったで、「花が咲いていた所に実をつける」という自然の法則に反する」と考えられたのである。

トウモロコシがヨーロッパであまり関心をもたれなかった理由がほかにもある。トウモロコシでは、ヨーロッパ人が食べていたパンをつくることができなかつたのである。トウモロコシには、コムギのようにイーストと結びついてパンを発酵させ、膨らませる働きをするグルテンが含まれていないからである。そのせいで、トウモロコシは一般にはどうい穀物とはいえない代物だと考えられていた。「人間よりブタにふさわしい食べ物だ」

といった植物学者もいた。しかし、トウモロコシはコムギなどの穀類と比べて優れている点があった。その一つが、トウモロコシはほかの穀物と比べて非常に収穫量が多いことである。一エーカーのトウモロコシ畑の収量は、同じ面積のコムギ畑の収量の約二倍に達する。もうひとつの特徴は、さまざまな気候や異なった環境でも栽培できることで、とくにコムギなどの穀物が育たない生育条件下でもトウモロコシであれば育つたのである。

こうして、トウモロコシは主としてコムギがあまりできないヨーロッパの南部地方で広く栽培されるようになった。とくにスペインからバルカン半島にかけての山岳地帯の谷間では夏に雨が降るところでよく育つた。この地域は、緯度でいえば北緯四〇度から四五度くらいのところで、後述するジャガイモがこれよりも高緯度のヨーロッパ北部で重要な作物になったことと対照的である。

やがてヨーロッパでもトウモロコシを主食とする人々があらわれる。その代表的な地域がイタリアであった。その背景には、民衆を長年苦しめてきた飢えがあった。在来作物の生産性が低く、天候も不順で飢饉が頻発していたからである。とくに、一七世紀から一八世紀にかけての食糧危機はかつてないほど厳

しいものであった。そのため、農民たちは生産性の高いトウモロコシ栽培を始めるようになり、一八世紀の末頃にはトウモロコシは北イタリアを中心に広く栽培されるようになった。

とくに北イタリアでは、トウモロコシを材料にしてつくったポレンタというものを主食にするようになっていった。このポレンタは、とろ火にかけた大釜でトウモロコシの粉を練り上げた、いわゆる粉粥である。そして、熱く黄色のポレンタは糸や紐ひもできりわけられ、パンのかわりとして食べられた。食生活の向上した現在でこそ、ポレンタは煮込み料理やソーセージ料理などの付け合わせ用になっているが、昔は北イタリアの貧しい人たちの主食であった。ドイツの有名な作家であるゲーテも、北イタリアの農民が毎日ポレンタをそのまま何も加えずに食べたり、たまにすりおろしたチーズをふりかけて食べている姿を記している。

一八世紀までには、ハンガリー東部でもトウモロコシが主作物になっていた。そこでもトウモロコシは、北イタリアのポレンタのような、プリツカとよばれるトウモロコシの粉粥として食べられた。また、このトウモロコシの粉粥はルーマニアではママリガと呼ばれ



図3 19世紀、中部ヨーロッパの農民によるポレンタづくり。大鍋でトウモロコシを煮ているところ。

て、やはり主食になっていた。ただし、ルーマニアではハンガリーや北イタリアよりもっとトウモロコシに依存していた。彼らはコムギとトウモロコシを主作物として栽培していたが、コムギはもっぱら輸出用であり、トウモロコシこそが彼らの主食だったのである。

これらの国のほかに、ユーゴスラヴィアでも、ギリシャでも、さらにセルビアでもトウモロコシは重要な作物になっていた。こうして、バルカン半島を中心とするヨーロッパ南部地方ではトウモロコシが安定的な食料供給に大きな役割を果たすようになり、それが同地域における人口の増加にも大きな影響を与えたのである。

## 戦争とともに拡大した

### ジャガイモ栽培

トウモロコシと違って、ジャガイモ栽培は急速にヨーロッパに世界に広がらなかったし、伝播した地域でも食糧としては容易に受け入れられなかった。それどころか、ジャガイモには毒があり、それを食べると病気になるといわれるなど、いわれなき偏見がつきまわった。その最大の原因は、はじめてジャガイモが持ち帰られたヨーロッパでジャガイモ

に類する作物がまったくなかったことである。

そのため、ジャガイモはヨーロッパでは食物としてよりは、地中にイモ（塊茎）をつける珍奇な植物としてみられていた時期が続いた。また、ジャガイモを催淫性のある植物とみなしていた人たちもいた。さらに、ジャガイモのイモをみて、当時不治の病であったハンセン病を連想する人も少なくなかった。現在のジャガイモは改良が進んでイモの表面がなめらかになっているが、当時のジャガイモの表面は凹凸が激しく、しかも色も悪かったため、それがハンセン病患者の皮膚を連想させたのである。

このようなジャガイモにたいする偏見も年月をへるにつれてしだいに消えてゆく。先述したように、当時のヨーロッパでは飢饉が頻発していたからである。とくに気温の低いヨーロッパの高緯度地方では収量の高い作物が望まれていた。そこでみなおされたのがジャガイモであった。ジャガイモはアンデス高地原産の寒冷地に適した作物であり、しかも痩せた土地でもよくできたからである。

もうひとつ、ジャガイモが普及するようになる社会的な状況もあった。当時、ヨーロッパ北部での主作物はコムギやライムギなどで

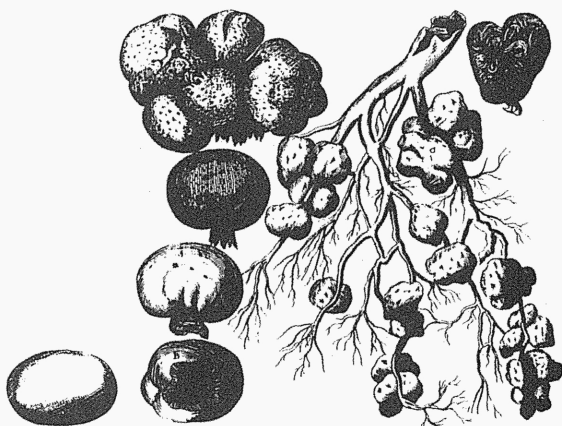


図4 17世紀にヨーロッパ人によって描かれたジャガイモの図。ヨーロッパにはジャガイモに類する作物がまったくなかったため、この図ではイモをキノコの一様として描いている<sup>4</sup>。

あつたが、これらの穀物は収量が低く、そのせいで飢饉が頻発していた。そのため、ヨーロッパ各国は領土の拡大をはかるため、戦争をくりかえしていた。その結果、兵士が麦畑を踏み荒らしたり、収穫した貯蔵庫の麦をしばしば略奪していた。このような状況のなかでジャガイモは戦争の被害が比較的小さかつたのである。ジャガイモは畑が少々踏み荒らされても収穫できたし、また畑を貯蔵庫がわりにして必要なときに収穫することもできたからである。そして、ジャガイモはコムギなどより何倍も大きな収穫があつたのである。

こうしてヨーロッパでは戦争がくりかえされるたびにジャガイモ栽培が普及してゆく。その発端になつたのが、一六八〇年代のルイ一四世によるベルギー占領のときであつた。そして、そこからジャガイモはドイツやポーランドに広がってゆく。とくにドイツの南部地方ではスペイン継承戦争（一七〇一〜一四年）のときにジャガイモが重要な作物になつた。さらに、七年戦争（一七五六〜六三年）のときにジャガイモは東のほうにも広がり、プロイセン（現在のドイツの一部）やポーランドでも栽培されるようになった。ナポレオン戦争（一七九五〜一八一四年）のときにはジャガイモ栽培はロシアにまで拡大したし、

ヨーロッパ北部でのジャガイモ栽培もいよいよさかんになつた。

とくに、アイルランドではジャガイモがきわめて重要な作物になつた。アイルランドは、気温が低いうえに、土地が痩せていた。さらに、当時、アイルランドの土地の大部分はイギリス在住の地主のもので、アイルランド人は自分の土地をほとんどもつていなかった。そのため、アイルランドは経済的にもどん底の状態にあり、国民の生活も貧しく、つねに飢饉の犠牲になつていた。そんな環境にジャガイモはびつたりの作物だつたのである。

アイルランドにジャガイモが伝わつたのは一六世紀の後半であつたが、それから一〇〇年ほどのあいだにアイルランド人といえば、「ジャガイモ愛好者」として知られるほどに、彼らはジャガイモをよく食べるようになっていた。そして、一八世紀の半ば頃には、ジャガイモがほとんど唯一の食料といつてもよい位置を占めるようになる。こうして、アイルランドではジャガイモ栽培がいよいよ拡大し、それにともなつて栄養不良がもとで病死する人もへり、人口は急増していった。すなわち、一七五四年に三二〇万人であつた人口が、それから一〇〇年足らずの一八四五年には約八二〇万人にまで増加したのである。

ここで、アイルランドでおこつた有名な「ジャガイモ飢饉」についてもふれないわけにはゆかない。じつは、このあとアイルランドでは思わぬ悲劇が待ち受けていた。一八四五年、ジャガイモの病気が大発生し、収穫はほとんど皆無となつたのである。この病気は、その翌年も終焉（しゅうえん）するどころか、また大発生し、数年間続いた。この病気の大発生は、アイルランドで世界の歴史でも例をみないほどの大飢饉をひきおこした。この飢饉でアイルランドでは約一〇〇万人が飢えや病気で死亡し、さらに一〇〇万人以上の人たちがアメリカ大陸に移住を余儀なくされたのである。

このようなアイルランドにおける悲劇はあつたものの、ジャガイモの価値は広く認められるようになっていった。そして、国の施策としてもジャガイモ栽培を奨励するようなところもでてきた。たとえばフランスでは、七年戦争のとき、ドイツで捕虜となつた農学者のパルマンティエがジャガイモの価値に気づき、フランスに帰国してからルイ十六世の庇護を受けてフランス全土にジャガイモ栽培を普及した。プロシアではフリードリッヒ大王（在任一七四〇〜八六）自身がジャガイモ栽培を促進した。一七四四年、大王は恩賜の種イモを配布させ、農民に栽培を強制し、ジャ

ガイモ栽培を普及させたのである。ハンガリーでは、一七七二年に飢饉がおこったあと、政府がそれまで同国では知られていなかったジャガイモ栽培を命じている。一八世紀末までにはジャガイモはヨーロッパ東部でも栽培されるようになっていった。

一九世紀になると、ジャガイモ栽培はヨーロッパ西部や中央部でも急増するようになり、ヨーロッパ東部のスラブ系の人々もジャガイモを積極的に栽培するようになった。ロシアでは一七六五年の飢饉がきっかけで、エカテリーナ二世がジャガイモ栽培拡大のキャンペーンを政府主導でおこなった。シベリアでもジャガイモはいたるところで栽培されるようになった。そして、一九〇〇年頃までにロシアは世界最大のジャガイモ生産国になったのである。

こうして、ジャガイモはヨーロッパ北部に住む人たちに安定的な食料を提供し、それによって何世紀にもわたってヨーロッパ人を苦しめてきた飢饉から彼らを解放した。さらに、その後、ジャガイモはヨーロッパ全体の社会をも大きく変える原動力にもなる。ジャガイモは、ヨーロッパを大きく変革した産業革命をも支える食糧源となったのである。産業革命時代のイギリス労働者の朝食は紅茶と砂糖

であったが、昼食や夕食はジャガイモが中心になっていたのである。

## おわりに

冒頭で述べたように、トウモロコシとジャガイモはヨーロッパだけではなく、アジアやアフリカでも重要な作物となり、そのおかげで飢饉から救われた人びとも少なくない。最後に、そのようなアジアでの例をひとつだけとりあげておこう。それは、登山のガイドやポーターとして有名になったネパール・ヒマラヤの高地部に住むシェルパの人びとである。もともと彼らは農業や牧畜で生計をたてていたが、主作物のソバやオオムギは生産性が低く、しばしば飢えに苦しむこともあった。そんなときは野生の植物、とくに野生のサトイモなどのイモ類を大量に掘りとって食糧にしていた。野生のサトイモはイモに多量の有毒成分を含んでいるが、それさえも救荒植物として利用しなければならぬほど食糧が乏しかったのである。そこへ導入されたのがジャガイモであった。それは一九世紀の中頃らしい。それ以来、ソルクンプ地方の食糧事情は大幅に改善され、とくにクンプ地方では「ジャガイモ革命」として知られるほどに人口が増加したのである。<sup>7</sup>

## 引用文献

- 1 シエサ・デ・レオン 一九七九（二五五〇）『インカ帝国史』増田義郎（訳）岩波書店
- 2 Benzoni, G. 1857 (1565) *History of the New World*. Press of Peter & Francis. Tri. Brothers, Venice.
- 3 Guaman Poma de Ayala, F. 1980 (1613) *Nueva Corónica y Buen Gobierno*. Siglo XXI, Mexico.
- 4 Stebbins, F. van 1975 *Theatrum Fungorum*, 1675. Cited in: National Research Council. *Lost Crops of the Incas*. National Academy Press, 1989.
- 5 ザンカーマン、L. 二〇〇三『ジャガイモが世界を救った』青土社
- 6 Fussel, B. 1992 *The Story of Corn*. Alfred A. Knopf.
- 7 山本紀夫・稲村哲也編 二〇〇〇『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界』八坂書房

## プロフィール

山本 紀夫（やまもと のりお）

国立民族学博物館教授

専門分野 ● 民族学・民族植物学

著書 ● ジャガイモインカ帝国—文明を生んだ植物—、アインカの未裔たち、「酒」くらの民族誌（共編）、「トウガラシの文化史」（翻訳）ほか